

小池都知事殿。言葉の弄びはやめてください

12日の記者会見で小池百合子東京都知事は、コロナウイルス感染防止に関して「自粛から自衛の局面に入った」と強調した。言葉を弄び、奇をてらう彼女らしい「話法」であるが、鼻についてきた。いい加減にしてほしいものである。

広辞苑をなぞってみよう。▼自粛＝自分で自分の行いをつつしむこと。▼自衛＝自分で自分を防御すること。——ということになる。

小池知事の「新語」を直訳すると、つつしみ行動から自己防御へ、ということになる。つまり自己責任論への転嫁である。自衛とは、自分で防御することだから「コロナウイルスに感染したら、あなたの自衛力が不足していたからだ」ということになるのだろう。

百歩譲って、「自衛」を強調するのであれば、そのための今までとは違う方策を同時に示すことが政治の責任であるはずだ。ところが何一つ示していない。ということは今までどおりの「自粛」しかないということであり、ことさら「自衛の局面」などと騒ぎたてる必要は何一つないのである。

「自粛から自衛へ」と同じ「自」を使い、まるで目新しいことをするかの如く振舞う様は、「裸の王様、的滑稽さを誘う。同時に週刊誌的に言うならば「女帝の自己陶醉」と映らないわけでもない。

そのうえで「東京アラート」などと言い出したことをおさらいしよう。それを発したあと都がやったことは、なんだったのだろうか。実質的には「夜の街」への批判だけだったという印象は拭えない。その「夜の街」に働くあの人たちに、どれだけの補償をしたのだろうか。

無節操極まる「猫の目政策」に要注意

東京アラートの象徴として、レインボーブリッジを朱色でライトアップした。本来なら、スカイツリーでやりたかったのだろうが（そのほうがはるかに目立つ）、大阪が通天閣で先にやったため、二番煎じを避けて「橋」にしたのであろうことは容易に想像できる。大阪への対抗心というか、なんとも子ども染みた発想ではないか。情けなくて笑えない。

いや、笑えることがある。東京アラートの在り方（基準）の見直しが迫られているというのだ。「東京都は12日、新型コロナウイルス対策の休業要請を解除・緩和する際のロードマップや、感染拡大の警戒を呼び掛ける『東京アラート』の内容を見直すと明らかにした。作成時に比べて感染者数の横ばいが続く状況や医療・検査態勢の改善に加え、経済活動への影響も考慮。再び感染者数が増加して休業を要請する場合の指標や呼び掛け方法などを検討する。」(20/06/12/共同通信ウェブ) というものだ。

振り返れば、東京アラートが新設されたのは「新型コロナウイルス感染症を乗り越えるためのロードマップ」の中に組み込まれた5月22日であった。1ヶ月も経たないうちに見直しが迫られているというのだ。こういうものを「猫の目政策」という。

4年前の都知事選挙で、築地市場の豊洲移転に関して小池百合子候補（当時）は反対を表明し、票を稼いだ。が、フタを開けてみたら「賛成」に回っていた。こちらはもっと情けない。折しも都知事選挙の告示（6月18日）が迫っている。心してかかりたいものである。

（事務局長・水久保文明）

*千代田区労協通信バックナンバー／http://www.chyda-kr.org/kuroukyou_news2020.htm

※皆さんからの投稿、感想・ご意見などお待ちしております